生命の言葉

令和七年乙巳歳
長月 九月

やまとうたは　人の心を
種として　よろづの言の葉とぞ
なれりける

紀貫之

神社は心のふるさと
未来に受け継ごう「美しい国ぶり」

「やまと歌」(和歌)は
人の心を種として
それがさまざまな言葉と
なったものである。

紀貫之

平安前期の歌人。三十六歌仙の一人。加賀介、土佐守などを歴任木工権守に至る。醍醐天皇の勅命で「古今和歌集」撰進の中心となり、仮名序を執筆。歌風は理知的で技巧にすぐれ、心と詞の調和、花実兼備を説いて古今調をつくりだした。漢詩文の素養が深く、『土佐日記』は仮名文日記文学の先駆とされる。

神道知識への誘ひ「古今和歌集」

平安初期の最初の勅撰和歌集。二十巻。醍醐天皇の勅命により、紀貫之・紀友則・凡河内躬恒・壬生忠岑の四人の撰者が編集して奏上した。仮名と漢文で書かれた二つの序文がある。詠み人知らずの歌と六歌仙、撰者らおよそ百二十七人の歌千百十一首を四季、恋以下十三部に分類して収めたもの。短歌が多く、七五調、三句切れを主とし、縁語、掛詞など修辞的技巧が目立つ。優美繊細で理知的な歌風は、組織的な構成とともに後世へ大きな影響を与えた。

今月の祭日

秋季皇霊祭（秋分の日）

宮中三殿のうち皇霊殿において、歴代天皇・皇族の御霊へのお祭りが行われます。天皇皇后両陛下をはじめ皇族方がご拝礼なされます。

東京都神社庁
http://www.tokyo-jinjacho.or.jp